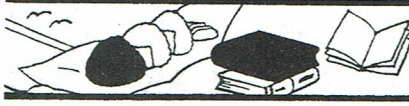


読売俳壇



矢島 渚男 選

自転車は風の乗り物いわし雲

高知市 加田 紗智

【評】風の乗り物。なんと清々しい言葉だろう。風を切り、風を起して走る。空には鱗雲が美しい。指示する子柿を挽ぐ子に受けとる子

東京都 山口 照男

【評】あすこのを取れと言いつ指示役、取る子、受け取る役。子供の遊びの世界を賑やかに描いて面白く。深秋や人の願ひに立つ地蔵

知多市 田上 義則

【評】村々に立つ地蔵さん。あれば村人の素朴な願ひを受け止めるために作られてきたものなのだろう。枕草子などから平安時代には普及していたようだ。安産・健康・豊作などすべての願ひごとを受け入れて下さる有難い菩薩様だった。

東京都 伊藤 直司

売られ行く黒牛の目に露の草
猿に似ん林檎を齧る我の顔

千葉県 池田 勝

秋深もあれよあれよこいふ間に
振り消して練香匂ふ秋時雨

相模原市 はやし 央

曼珠沙華牧野博士の細密画
函館の坂といふ坂ななかも

久喜市 深沢ふさ江
岡山市 宮下 哲朗
奈良市 上田 秋霜

宇多喜代子 選

灯台の灯の中に降る秋の雨

浜松市 久野 茂樹

【評】灯台の灯が、雨の筋をくつきりと浮かび上がらせている。「中」に降る雨の様子を具体的によく言い表している。

秋の声点字の旅行案内書

芦屋市 田中 俊

【評】秋、旅に出たくなる季節である。目の不自由な方も然りだろう。そのための案内書。目の不自由な人たちにとても、かけがえのないものである。

全員が菊着せられて菊人形

山形県 沼沢さとし

【評】菊人形を見ていると、人間の仲間に見えてくる。当然のことながら全員が菊を着せられている。そこに面白味がある。

一列のメタセコイアに月明り

熊谷市 柿沼 好枝

荒川線一と駅ごこの小春かな
秋風や行き来の増えし土手道

八王子市 徳永 松雄

頬なぶり風走りゆく芒原
ふつくと文字書く叔母や秋彼岸

神戸市 吉野 勝子

御囃子の大きく小さく秋祭
戸締りをもつ一度みる夜長かな

奈良県 若林 明良
前橋市 豊嶋啓一郎

正木ゆう子 選

異界へと続く縁側秋の聲

甲府市 村田 一広

【評】昔はごく普通に在った縁側も、閉鎖的な家ばかりになった今思えば、どこか非日常的。夜よもなれば、縁側は闇へと繋がる入口であった。子供達の世界観にも影響したか。

空澄めりひとり生きる骨拾ふ

厚子市 鈴木喜久代

【評】二人で生きてきたけれど、これでどうとう一人になった。一人で生きて行く。仰げば、空が青く澄んで、静かな覚悟を見守っている。

名月や地球は青きままなるや

大分市 加藤 元二

【評】「地球は青かった」は宇宙飛行士ガガーリンの言葉。以来、青いのが当たり前だったのに、にわかにあやしくなってきたこの頃である。

屋根石を数個補充し牧を閉つ

栃木県 あらあひこし

登音し潜む蝗を掴みけり
四つに切るかばす豊かに満れり

朝霞市 田口 純

かたちなきものにも時空火恋し
アスリート皆磨り減りて秋終はる

名取市 里村 直

棒切れのやうな鶏鳴秋の屋
人影に散りゆくものや水の秋

福島市 引地こうじ
東京都 望月 清彦
岩出市 沢田慎一郎

小澤 實 選

離島よの離島猪泳ぎゆく

香芝市 中村 翠孝

【評】餌の乏しい離島を出て、猪は餌の豊かな島を目指して、なんと泳ぎわたるといふのだ。猪という動物のもっている胆力とエネルギーの熱量が、恐ろしくも思える。

張り込みの吸殻五つ望の月

志木市 谷村 康志

【評】名月の夜、容疑者を張り込みする刑事が、吸殻を五つ残した。これによって、数時間ここで過ごしたことがわかる。刑事俳句、珍しい。

銀杏を拾ふ子唄ぐ子踏み行く子

茅ヶ崎市 清水 吞舟

【評】銀杏を拾って持ち帰る子もいれば、嗅いで大声をあげる子も、踏み潰していく子もいる。まさにさまざま。銀杏の匂いが立ちのぼる。

階段を夜学生パン齧りつつ

長野県 小沢 隆

高原のチーズ工房草紅葉
菊師去る狐忠信由に吊り

秩父市 中島由美子

用済みの歯ブラシ持参洗ふ
露草や急ぐな急ぐな父の声

名古屋市 可知 豊親

残る蚊を片手払ひに庭手入
秋の夜の美容パックにきよっと夫

瑞浪市 岩島 宗則
東京都 河野 樹美
秋田市 松井 憲一
白井市 毘舎利愛子

広告メディアで

短歌あれこれ 松村由利子(歌人)

マルチな仕事をした与謝野晶子は、広告の分野でも活躍した。発売後まもないカルピスの新聞広告に歌を寄せたのは、当時の晶子の人気と知名度の高さを示すものだろう。また、高島屋百貨店の「百選会」にも約20年にわたってかかわった。

「百選会」は今で言うコレクシヨンのような催しで、晶子は顧問としてシーズンごとの流行色のネーミングや、出品された着物や帯にちなむ歌の創作に携わったのである。

なつかしき数石の道正午なり秋も琥珀茶帯も琥珀茶ある年の百選会の折に詠まれたこの歌には笑ってしまう。かつて晶子自身の詠んだ有名な「ああ草月仏蘭西の野は火の色す君も雛粟わわれも雛粟」をもじっているからだ。

渡仏した高揚感の中で詠まれた歌の「コクリコトコほく」を響かせたあたり、晶子の意外なちやめっ気を見る思いがして、大好きな一首である。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭